W校中高等部だより

のみの市特集

令和元年（２０１９年）十二月二十一日

ニューヨーク補習授業校　W校



十一月九日に中高等部主催の「のみの市」が開催されました。九月七日には第一回のみの市委員会が開かれ、そしてその日からのみの市委員を中心に、生徒会の今年度の目標「笑顔～明るく仲良く元気よく～　学級の仲間と、お客さん、困っている人たちに笑顔を届けよう！」をテーマに、中高等部全員がそれぞれ一人ひとりが力いっぱい活動してきました。

今年は、中等部一年一組・二年一組・二組・三年一組・高等部一年一組・二組、高等部二年一組の七つのグループに分かれてブースを出し、各学年とも幼児部初等部向けのゲームコーナー、各家庭から出品していただいたバザーコーナー、保護者の方々からなるベーク製品コーナー、そして生徒たちのアイデアを凝らした食べ物コーナーに分かれて出店しました。

九月から始まったのみの市委員会では、最初に収益金の寄付先を決定しました。今回の寄付金は、千葉県市原市の非営利団体「風呂の前里山保存会」へ送ることになりました。二か月の取り組みで、各クラスの出し物を決定したり、幼児部初等部向けのゲームを決めたり、各出し物の担当者を決めたりと毎週忙しく会議を重ねてきました。

出展内容がなかなか決まらなかったり、細かな点で意見が合わないことがあったりといろいろなドラマがありましたが、思いはひとつ、できるだけ寄付金を集めようと、「常に全力」で取り組みました。

のみの市当日、保護者の方々による準備から始まり、十二時少し前にはすべての準備が整いました。幼児部のかわいいお友達が来場したところから会場内は緊張感が広がり、のみの市の雰囲気が高まりました。初等部の保護者の方々や生徒の皆さん、一般のお客様、卒業生などが来場し、一時は身動きが取れないほどの混雑ぶりになりました。すべての生徒が忙しく体を動かし、お客様のために最高の笑顔を作り、「常に全力」で一生懸命頑張っていました。

計画に大きなずれもなく、のみの市は無事終了し、保護者の助けを借りながら後片付け、そして各クラス会計担当による集計も終了しました。最後に今回の集計結果が生徒会会長の阿部純子さんから発表され、収益金の合計は４２８８ドル７７セントでした。４０００ドルを超える売り上げで、会場から大きな歓声が上がりました。生徒たちはこの達成感を忘れることはないでしょう。

のみの市当日、またのみの市開催に至るまでの過程で色々とご支援いただきました保護者の皆様方には心から感謝申し上げます。

のみの市

中等部一年一組　　小泉　和響



先週、学校でのみの市が行われました。のみの市とは、学校で様々な商品を売買して、儲けた金を寄付するというイベントです。今年は千葉で台風の被害を受けた人々へ寄付されました。のみの市では、中学生が売って、小学生が売っているものを買います。僕は中学一年生なので、今年初めて売る役をしました。中学生たちは雑貨や食べ物を売って、ミニゲームなども作りました。僕のクラスでは雑貨と抹茶を売って、輪投げを作りました。売るものやミニゲームは生徒たちが決め、値段を決めるのや、実際に売るのも生徒たちがしました。人に僕のクラスで作った抹茶などを買ってもらうために、ポスターなども作りました。

のみの市のために準備をするのは大変でした。何を売るか決める時や、値段を決めるときはみんなが意見に賛成しなかったので、時間がかかりました。例えば抹茶の値段を決めるときは、みんなが高すぎると言っていたのに、結局三ドルになりました。僕はポスターを作るのに一番頑張りました。僕は輪投げのポスターの文字を書きました。他にもアレルギーのポスターや抹茶のポスターを作るのを手伝いました。

実際ののみの市では、僕は輪投げ係でした。主に輪投げの手伝いをして、少しだけベークセールと抹茶と雑貨を売る手伝いをしました。輪投げ係は来た人数を数える人や、来た人に輪を渡す人や、賞品をあげる人がいます。僕が輪投げの手伝いをしてるとき、たくさんの人が来てくれました。輪投げ係はたくさん人が来てくれたので楽しかったですが、ベークセールなどではあまり人が来なかったです。

今年ののみの市では、学校全体で約四千ドルほど稼ぎました。僕のクラスは約七百ドル儲けました。個人的にのみの市は楽しいことをたくさん経験できるのでよかったです。来年ののみの市も楽しみにしています。



のみの市を終えて

中等部一年一組　　河野　恵理果

今年は中学校に入学して初めての年なので、のみの市に参加するのは初めてでした。私はのみの市がとても楽しみで気合が入っていましたが、クラスのほとんどの人たちはあまり興味がないようでした。準備はとても大変で助けが必要に見えたので、私はのみの市委員ではありませんでしたが、委員の人たちと一緒になって必死に働きました。それでも、抹茶ラテが売れるとはとても思えず、当日まで不安はぬぐえませんでした。

のみの市当日。私は、みんなが協力してくれるのかどうかわからず不安に思っていました。ところが、みんなは私の予想を裏切って、必死になって働いていました。トレーに抹茶を載せて、積極的に売りに行く人。大きな声を出して、客引きをしたり、タグセールの物を売ったりする人。ポスターを掲げて、お客さんを呼んでくる人。裏で、一生懸命抹茶を作り、机に並べる人。お金のやりとりをして、集計する人。ゲームで小さい子供に呼びかけて、一緒に遊んであげる人。やることが何もないという状況は一度もありませんでした。いつもは男女が分かれることが多いのですが、この日だけは男女関係なく一緒になって働いて、そして笑いました。

私は、幼児部からの八年間の補習校生活において、こんなに充実して、笑って、楽しんだ経験はありませんでした。みんなと協力して働くことが、こんなに楽しいとは思いませんでした。補習校生活の中で、来年またやりたい、楽しみだと思ったことは正直初めてでした。のみの市を経験できて本当に良かったです。きっといつまでも忘れない経験だと思います。



のみの市川柳

中等部二年一組　渡邉　喜

のみの市　人が多すぎ　緊張し　結局誰とも　話せなかった

のみの市　クラスの出し物　素麺は　甘くないから　結構売れた

休憩が　三十分だけ　短すぎ　弁当なんにも　食べれなかった

三角巾　男子全員　ハチマキに　努力の汗が　流れぬように

のみの市　疲れたけれども　楽しいな　また来年も　楽しみだ



ネギと私

中等部二年一組　　ウォーカー　美咲



私は今年二年目の「のみの市委員」になり、クラスの出し物は「そうめん」と「カップポングゲーム」に決まった。各自の持ち物を決めて、私はネギと水とハロウィンの余ったお菓子の係になった。前日にネギを八束買いに行くと、一緒に委員をやっている静さんから「ネギは切っといてね。」とテキストが入った。夜になって切り始め、終わるまでに一時間半もかかってしまった。

前に切ったことはあるけど、こんな量を切ったことがない。最初分厚く切っていたら、母に直されて幅を薄くしてみる。今度は薄く切り過ぎて、「しる」が飛んで目に入り始めた。すぐに涙が出て来て、目をパチパチしながら、数分置きに床に寝転がっていた。全て切り終わって、ジップロックに入れて、冷蔵庫の中に入れた。手も腕も目も痛かったので、寝ようと思って目を閉じたら、目が燃えているようにジンジンとしみた。でも、疲れていてすぐに寝てしまった。

朝起きた時、母は笑いながら「冷蔵庫がネギの匂いでプンプンしてるよ。」と言った。台所に行って冷蔵庫を開けたら、ネギの匂いでいっぱいだった。よく見ると、ジップロックをきちんと閉めていなかった…。母と弟と一緒に、ネギの袋、水、お菓子、ベークセールの品物、売る雑貨を、二年一組のテーブルに持って行った。

そうめんは大人気で完売！全部売れたと思ったら、荷物に隠れた袋の中から三箱いっぱいのそうめんを見つけてしまい、「持ち帰りそうめん」と言いながら、中高等部の人達に分けた。残ったネギの袋を「美咲ちゃん、持って帰る？」と聞かれて、すぐ「いらない！」と答えた。しばらくネギは見たくない。

今年も去年のように売上がとても良かったので、寄付する先はすごく助かると思う。私のネギも少しは役に立てたと思うと嬉しい。来年はどんなアイディアが出るか、今から楽しみ！



のみの市

中等部二年二組　　松下　天美

今年は私達にとって二回目ののみの市でした。二年二組のクラスの出し物は、空気砲射的とゼリーでした。

幼児部が来た時、私のグループはゲームの担当でした。私達は、幼児部さんたちにゲームで遊んでもらうために努力をしなければなりませんでした。最初は普通に、「射的で遊ばない？」と聞いていたけれど、途中から幼児部にいる子たちが「射的」という言葉の意味を知っているかわからなくなっ



たので、「射的っていう楽しいゲームで遊ばない？」などの聞き方に変えてみました。これが効果的だったかはわからないけれど、何か工夫をしてみることに悪いことはありません。

けれど、六年生には全くと言っていいほど効果がなく、誰も遊びたがらなかったので、知り合いや兄弟に聞くしかありませんでした。途中で、射的に使っていた、ペットボトルのはじに風船がついていたものが壊れてしまいました。誰かが風船を引っ張る部分を爪で破ってしまったようでした。もう一つ予備があったから助かったのですが、その予備の風船もいつ破れてもおかしくない状態だったので、みんながそわそわしてしまいました。来年は、ゲームの器具などは余分を沢山準備しないといけないと思いました。

ゼリーの販売は、私は他の人と一緒に補習校の一階を歩き回って売りました。あまり売れなかったけど、少しでも売れて良かったです。宣伝の大事さを知ることができました。ただ立っているだけだと何もならなかったので、直接色々な人に聞き回ったりみんなが聞こえるように話したりしないといけませんでした。

雑貨を売っている時には、アクセサリーをディスプレイしたコルクボードを持ち、小さい女の子におすすめして、沢山売ることができました。

今年ののみの市では、「ものを売る」ということが少しわかってきました。自分から工夫や宣伝をしなければ何も売ることはできません。また、いろいろな問題が発生しても、みんなで協力し合えば解決できるということも学びました。

来年は、六年生にのみの市の楽しさをもっと感じてもらえるように工夫をしていきたいと思っています。

のみの市

中等部二年二組　的場　千奈



今年ののみの市は、私にとって二回目でそして冬休みに転校するので最後の蚤の市になった。去年は初めての経験でのみの市の委員に入ったものの、全てが初めてで最初は自分でもついていけるか心配だった。委員会の時は、少し戸惑うこともあった。あれから一年。今年は去年とは違って心配などあまりしなかった。「のみの市」という言葉を聞くと心はワクワクした。私は二回の蚤の市を通して感じた蚤の市の良さを三つ書いてみた。

一つ目は、のみの市の収益を寄付することができるということだ。今回は千葉県の台風被害にあった人たちのために寄付をすることになった。私は、のみの市をする本当の理由を実は中等部に入るまでよく知らなかった。のみの市は、お祭りのような楽しみだけの行事だと思っていた。自分たちが活動して集めたお金が日本で役に立てるということはいいことだと思う。

二つ目は、のみの市を通して他学年の人たちや自分の学年でも交流を深めることができることだ。他学年の人と話すチャンスは、このような全学年でやる行事以外あまりない。他学年だけではない。自分たちのクラスでもあまり話さない人たちと話す機会ができる。準備もいろいろな意見を出し合って「これ、いいね」「これは少し厳しいかも」など、人の意見も入れてみんなで選んで決めていった。意見などを出し合って話し合うと、自然といろいろな人たちと話せるようになる。当日も「これ運ぶの手伝って！」と言ってみんな協力しながら準備を進めた。また、のみの市に買いに来てくれる幼児部の子たちや六年生の子たちとも交流することができる。幼児部の子たちは小さいので私たちはしゃがんで、「何が欲しい？」と尋ねたり、商品を渡してシールを張ってあげたりした。買ったものを嬉しそうにしている様子を見ると私も嬉しかった。六年生にも「これ買っていきませんか？」と聞いたり、「このゲーム楽しいよ！」と宣伝したりした。その宣伝で遊んでくれたりすると、とても嬉しかった。「これ、面白いよ！」と私たちが言い「これ一回何ドルですか？」と六年生が聞いてくれるだけでもいい交流だと思う。

三つ目は、私はのみの市を通して「物を大切にする」ということに気が付いた。もう自分が必要ないと思ったものでも、まだまだ使えるものも実はたくさんある。私は今回五歳くらいの時から大切に持っていたヘアゴムやアクセサリーをたくさん雑貨販売に出した。好きで持っていたけれど、ここ数年はポーチにしまい込まれ全く使っていなかった。のみの市で、それを気に入ってくれる人や使ってくれる人が買ってくれるといいなと思っていた。のみの市はまだ使えるものを次に大切に使ってくれる人や必要としている人に譲ることができる場だ。私は、物を見るとついほしくなってしまうことがある。しかし、買った直後は使っていても、しばらくしたら存在を忘れてしまうこともある。二回目ののみの市で改めてもっと物を大切にしようと思った。幼児部の子たちは、買ったものをバッグに入れて大切そうに持ち歩いていた。そんな様子を見て、これからは今持っているものも、もっと大切にしようと思った。

のみの市にはたくさんの良いところがある。二年目だったけれど新しく学んだこともあった。私は、みんなで集めたお金がより多くの千葉の人たちを助けられるとうれしい。今回ののみの市で他学年と少しでも交流を深められていたらうれしい。そして、寄付した雑貨がまた大事に使われるといい。私にとって最後ののみの市は、昨年以上に充実した時間だと感じられた。



笑顔のために

中等部三年一組　中　柊也

僕の補習校の楽しみのひとつの「のみの市」の前日に、僕はこのクラスの出し物であるミルクシェイクの準備をした。いちご味を作る役目であったため、いちごをどれくらいの数入れて混ぜるべきかを試行錯誤して、やっとベストな作り方を見つけた。この作り方を見つけるのは難しかったけれど、のみの市に出すのが嬉しかった。

のみの市当日、僕はくずさないように慎重に教室まで運んだ。すべての授業が終わり、いよいよのみの市が始まる。僕はわくわくしながらのみの市の準備をした。みんなで気を付けることや、接客の仕方を最後に確認した。



のみの市が始まり、幼児部の子どもたちが買いに来た。僕は目線を合わせて優しくシールを貼った。すると、その子は笑いながら「ありがとう。」と言ってくれた。僕は嬉しかった。幼児部が終わり、六年生が来た。僕は、雑貨から食べ物を売ることになった。僕たちは一生懸命接客したが売れなかったので、友達と一緒にいろいろな所へ行って買ってもらうことにした。すると、びっくりするほど売れてしまったため、大急ぎで補充をしに行った。商品を買っていただくことはとても嬉しいということを実感した。

のみの市を終え、片付けに取りかかった。僕たちのミルクシェイクは、きれいに全部なくなっていた。合計金額を集計し、他の学年には及ばなかったけれど、僕たちの集めたお金で困っている人たちを助けることができるのはとても嬉しい。そして、このような商売という貴重な体験が出来てとても楽しかった。小さなクラスでも、一致団結してみんなが力を合わせることができて満足しているし、清々しい気持ちでのみの市を終えることができた。来年は、今年を超えるつもりで臨みたい。また僕たちの集めたお金で、困っている人を笑顔にできればいいなと思った。



楽しかったのみの市

高等部一年一組　グレイ　ダニエル

今年ののみの市は私にとって一番楽しいのみの市になった。まず今年はのみの市委員にボランティアをした。委員は初めてだったのでいったい何をやるのかわからなかった。

最初は出し物についてクラスで話し合い、色々な案が出たが、その結果私たちの出し物はわらび餅に決まった。ゲームは三つのコップのうち、ボールがどのコップの下に隠されているかを当てるシャッフルゲームに決まった。わらび餅を作

るためのレシピは色々あるのでどのレシピが一番良いかを確かめるためサンプルを作る必要があった。その為、先生はわらび餅粉やソーイクリームを使ったわらび餅を作り、私はタピオカ粉を使ったわらび餅を作ってみた。レシピのとおりに作っていたが結果がどうなるかとても不安だった。次の日クラス全員で食べ比べをし、タピオカ粉を使ったレシピを使うことになった。土曜日だけの学校なのでのみの市の数日前にはラインでわらび餅の作り方などの情報を交換することによって、今まで土曜日以外は交流しなかったクラスメイトと連絡しあうことができた。



のみの市の日の朝、皆でいつもより早く学校に着いてポスターやゲームを作り上げた。十二時の幼児部さんから始まり、二十分ごとにシフトが変わって活動していった。私の一番好きだったのはわらび餅をうることだった。なぜならみんなで作った手作りの出し物を大勢の人に買ってもらうのが嬉しかったからだ。私たちの出し物は和風でお客様に喜んでもらえたと思う。

中学生の時はあまり積極的に活動しなかったけれど、高校生になって責任をもつチャレンジができたと思う。来年ののみの市を楽しみにしている。

のみの市カウントダウン

高等部一年一組　藤堂　直緒子

来年で補習校の最終学年になり、最後から二番目ののみの市となった今年。幼児部と初等部ではお客さんとして楽しむ側だったのが、中等部からは売り手として楽しませる側へ、そして今、じゃっかん余裕でシャッフルゲームをしたりわらび餅を売っている側であることが信じられないです。

私は子供が苦手だから、のみの市前はいつも少し緊張します。しかし、ゲームでは子供達の目線と同じ高さになるようにしゃがみ、「よくできたね！」「すごい！速いね！」などと声をかけると、子供達も乗り気になり、楽しんでもらうことができました。

そして、大人気のわらび餅。途中で全部売り切ったと思いましたが、テーブルの下を確認するとまだ二箱あって焦りました。でもこれまで、食べ物、ゲーム、雑貨、ベークセールと担当テーブルを交代していく中で、食べ物担当がローテーションの最後の方だと、その頃には食べ物が売り切れてしまい、私自身も含め、売り子の体験をできない人たちが出ることがありました。だから、今年はみんなが売り子をすることができて、とても良かったです。

一年一組は、グループチャットで連絡をとりあいながら毎週コツコツ準備をしてきて、のみの市本番ではみんな準備万端でした。ゲームに使う道具集め、わらび餅の試作と試食、買い出し、調理など、一人一人がクラスのことを思ってみんなで助け合い、クラスの団結も強まったと思います。きちん

とコミュニケーションをとりあい、みんなで協力して頑張った結果うまく行った達成感は、やっぱりいいと思います。
来年はクラスも小さくなると思いますが、コミュニケーションと協力をよくすることで、来年最後ののみの市もうまく行くと思います。

働くこと

高等部一年二組　　山﨑　さくら

私は今回初めて、のみの市を体験しました。補習校での行事の中で、一番のメインイベントだと聞いていたので、とても楽しみにしていました。



私のクラスでは「タピオカ」を売ることになりました。現在、日本でもアメリカでも若い人たちを筆頭にとても人気のありドリンクです。
いつも飲んでいるタピオカドリンクをどのように作れば良いのか、調べることから始まりました。宮崎さんが自宅で試作したものをお昼に試飲しました。前日にタピオカを茹でて冷凍したものと冷蔵したもの、そして朝に茹でてきた三種類を試飲しました。そして朝に茹でることに決めました。のみの市の前日にお泊まりをし、タピオカを作りました。
当日たくさんのお客さんが補習校を訪れました。私たちはタイムスケジュールに従って働きました。始めは幼児部と六年生がやってきました。私のクラスのゲームは押し相撲でした。**私が担当したのは幼児部だった**のですが、後ろに倒れないか、常に注意してゲームを行なったおかげで、安全に終えることができました。タピオカを売る係になった時、多くのお客様が一度に来る時などは、とても忙しく、ゆっくりと接客ができなかったのが残念です。ゆとりを持って接客ができるよう、何か考えたいです。



バタバタした一日でしたが、とても充実した一日でした。初めて自分で作ったものを売り、美味しいと言われる嬉しさを知りました。働く大変さも知りましたが、それ以上の喜びが私の心に響きました。

のみの市

高等部一年二組　　静　碧海



今年ののみの市を振り返って割合良かったと思う。去年の私のクラスと比べ、非常に良かったと言える。去年のクラスではチョコバナナをやったが、利益が出ないという驚きの結果となった。

今年は、押し相撲、バブルテイーをやった。押し相撲はあまり人気がなかったが、バブルテイーはタピオカがなくなるまで売り切れた。タピオカが、少し失敗してしまい、量が減ったからお茶が余ってしまった。売り上げは五〇〇ドル以上もにもなったし、評判も良かったし、大成功と言えるだろう。

しかし、失敗したことも少なくなかった。先ほども述べたように、タピオカの3分の1ぐらい失敗してダメにしてしまったこと。また準備や持ってくるものを決めるのがギリギリになり、話が行き届いていなくて、材料が足りなかった。そこは親の協力もあり、なんとか用意できた。失敗もあったが、みんなの協力で結果的には大成功にすることができた。

これらのことを通して「のみの市」で学んだことは、「のみの市」は、みんなの協力があってようやくなりたっている。また他にも親や先生の協力も大事である。そして、生徒たちは親や先生への感謝を忘れてはいけない。

七人での格闘

高等部二年　　豊村　真帆

「これはオールで、次はイチゴだけ、はーい！」

私たちは機械のようにクレープを次から次へと差し出した。休憩なんて取っている暇はない、ローテーションなんて知るか、作って作って売りまくれ！

今年もやってきたのみの市。だが今回は欠席と体調不良で早退があり、過去最少の七人でローテーションを回さなくてはならなかった。各場所に二人ずつ、クレープは会計を含めて三人のチームを組んだのだが、とめどないお客さんの波に押され最終的には持ち場から動けなかった。

そういう流れで、私はクレープ班から身動きできなかった。会計からオーダーを取り、接客と呼び込みをし、どんどん減っていくイチゴの量を考えながら、私たちはクリーム、フルーツ、ソース、生地を折る、の作業をひたすら繰り返した。アドレナリンの恐ろしい効果のおかげで空腹なんて誰知らず、休憩に入ったのはお客さんの波が引いてきた二時ごろだった。屈んでいたせいで固まってしまった体を伸ばし、眼鏡の曇りの元凶だったマスクを投げ捨て、私は母が作ってくれた三色弁当を手に休憩室へ向かった。

だが休憩中も休んでいる暇はなかった。そう、最後ののみの市なので私は他学年の出し物を全制覇したかったのだ。すぐさま三色弁当を流し込み、軽い足取りで今度はお客さんとして第二カフェテリアに戻った。抹茶、そうめん、クレープ、わらび餅を何とか両手に納め、慎重に休憩室に戻った。母が持ってきてくれた残りのタピオカとシェイクも口に詰め込み、



ゼリーは友達のを一口もらった。全て生徒が作ったと思えない完成度で、リピートした品もあった。そんな暴飲暴食のせいで胃袋が悲鳴をあげていたのは後の話。

最後ののみの市、という実感は家に帰るまで私を襲わなかった。それがやってきたのは疲労困憊でリビングのソファーに座り、一息ついた時だった、「あー、終わったな」というあっけない、しんみりした実感だった。死ぬほど忙しかったけど、ピンチの時はストレスを感じたけど、やっぱり楽しかった、終わってほしくなかった。また来年があって欲しかった。残り数少ない補習校のイベントを思い浮かべながら、これも最後の一回、とエプロンを洗濯カゴに入れた。

